

「災害の軽減に必要なとなる 情報とは何か」

第2回平成28年度災害廃棄物対策推進検討会

神戸学院大学現代社会学部社会防災学科

日本災害情報学科理事

日本社会貢献学会事務局長・理事

減災報道勉強会「関西なまずの会」会長

安富信

地震災害情報ってどんなものがある？

	発災時	応急時	復旧・復興時	平時
個人・世帯	自己防衛 地震情報 被害情報 避難情報	地域との連携 被災者情報 被害情報 火災情報	地域との関わり 復旧情報 復興情報 火災情報	自己啓発 地震学情報 地域防災情報
地域	自己防災活動 負傷者情報 火災情報 交通情報	地域共同体での対応 避難所情報 ボランティア情報	復興計画参加 復旧復興情報 ライフライン情報	コミュニティー活動 地域防災情報
企業	企業防衛 安否情報 被害情報	地域への応援 被害情報	営業の再開 復旧情報 ライフライン情報	防災力強化 危機管理情報 地域防災情報
自治体	災対本部設営 被害情報	市民生活確保 被害情報 被災者情報	復興の最適化 復興情報	防災力強化 危機管理情報 地域防災情報
国	災対本部の立ち上げ 被害情報	後方支援の最適化 被害情報	財政支援	防災力強化 危機管理情報
国際	救急救命 被害情報	後方支援 被害情報	復興支援・技術移転 復興情報	技術移転・ネットワーク 支援情報

の中で今回の「災害の軽減に」は平時の情報？

- 復興の考え方の中に、「事前復興」が言われている。
- 情報ってどちらかと言えば、起きてからの発生「情報」や危機管理「情報」の意味合いが強いが、「事前の情報」がこれからは大切かも。
- 自治体が発信する「情報」の代表的なものに「避難情報」がある。
- これが、上手く伝わらないのは承知の事実。昨年9月の台風○号の際の、「避難準備情報」がそれ。
- 誤解を恐れずにはっきり言って、たいてい、役所や自治体が発する情報は国民、住民には理解されていない。
- 公務員の方を前にして悪いのですが、役所用語を羅列されると、小難しい？まだるっこしい？

ワンフレーズで人気を得た首相がいましたが。

事前情報って？

- 情報、って大きな意味で言えば、どの段階でも情報であるのに、どうも、災害情報学会等においては、ほとんど発生後の情報を指す。
- じゃあ、事前にどんな情報が必要か？ 災害の被害を軽減するためには、事前にどんな情報が必要か？といった観点から考えましょう！
- 例えば、専門ではないのですが、災害廃棄物は、地震や水害によって出る廃棄物、壊れた家屋、家屋の中にあった物、元からあったゴミ等、災害が発生した後に出る物、例えば、避難所で食べる物、トイレ、生活していくうえで出る物、、、
- 事前に考えなければならないことの最大の点は、やはり、壊れた家屋、家屋のなかにあって壊れて使えなくなった物でしょう。とすれば、事前の情報として必要なことは、家屋が壊れないようにすることでしょうか？となれば、老朽化した建物の耐震化を強める国や自治体の取り組みとタイアップする必要があるのでは？
- 南海トラフの巨大地震で出る、災害廃棄物の推定量は？みなさま、専門家ですからご存知でしょうが、たぶん、膨大という言葉では表せないほどの量？ 処理できないのでは？

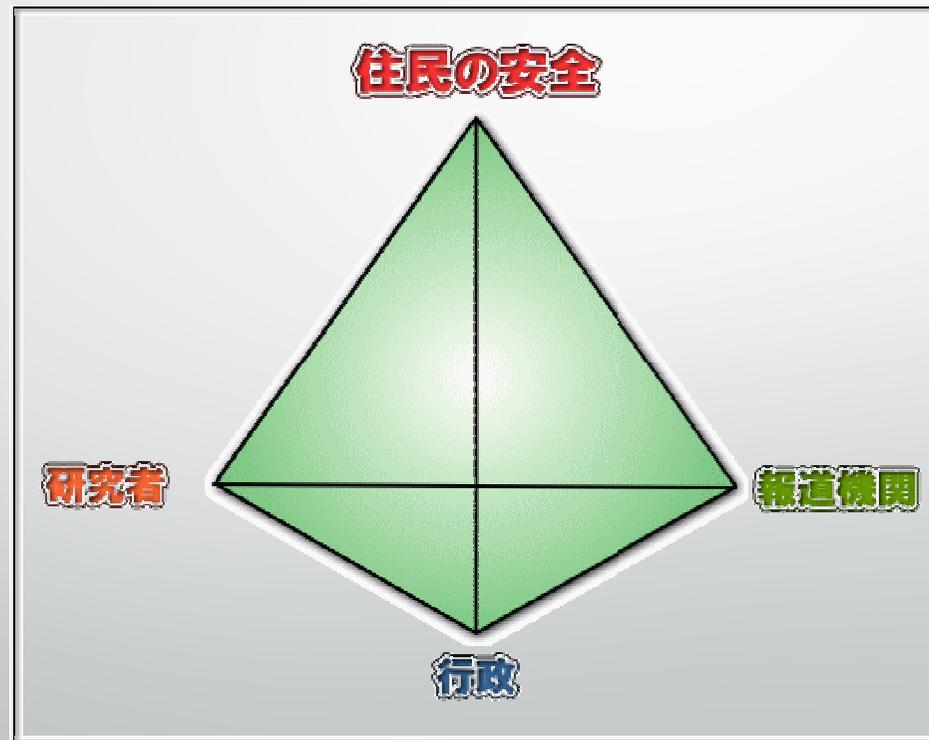
ならば、事前の取り組みを強化する？ 耐震化や家具転倒防止なども役に立つ情報では

トイレの問題を含む避難所での廃棄物

- トイレの問題は、災害関連死に関連する重大な問題だが、意外と注目されていない。エコノミークラス症候群との絡みもあるが、災害廃棄物としての視点も必要では？
- 阪神淡路大震災で避難所のトイレ問題が顕在化。その後、中越・中越沖、能登半島地震などで現場の避難所を見て歩いたが、（亡くなった黒田裕子さんが教えてくれ、日本トイレ問題研究所の取材もしたことがある）能登半島地震の輪島市ではかなり改善されていた。要するに汚くなく、てんこ盛りでもないトイレの出現。しかし、東日本大震災、昨年 of 熊本地震では逆戻りした。
- 余談ですが、阪神淡路大震災以降、その教訓が叫ばれて、色々な問題が改善されてきた流れが、熊本地震では全く逆戻りした。避難所の食事問題やエコノミークラス症候群、避難所の劣悪な環境、トイレも。

防災（減災）の正四面体

2000年の有珠山噴火の際に、出来た理想の形
特にマスコミが全面的に研究者、行政に寄り添い、報道し続けた。



逆戻りしているのは、どこか？ 一番退化しているのは、マスコミ！

- 一言でいえば、日本のマスコミが災害に目覚めたのは、1995年の阪神淡路大震災。それまでは、時々起きる台風被害や水害、噴火などに場当たり的に対処してきただけ。
- 都市部である神戸・阪神間での甚大な被害に、少なくとも関西のマスコミは危機感を抱いた。これから引き続き、大きな地震や水害が悪化、噴火災害も起きるという研究者の話を真面目に聞き始めた。→専門記者の必要性を考えた。東京はもう少し待たなければならない。→中越、中越沖、東日本大震災までか？
- 南海トラフの巨大地震が叫ばれるようになり、その前に東日本大震災が起きた。しかし、マスコミ内部の専門記者の崩壊が始まっている。
- 簡単な話。新聞は部数が激減し、記者も大幅に減らしている。専門記者どころか、日々現場に赴いて取材をする記者がいなくなった。役所の発表を待つ記者、官邸の発表をそのままパソコンに打つ記者。→〇〇記者と呼ぶらしい。
- 専門記者どころか、記者としてのイロハも知らない記者。だから、各社のデスクから上の人間は、記者が書いた記事を信用できず、当たり障りのない記事になってしまう。深みがないから面白くない。

そういうマスコミのもとで大きな災害が起きるとどうなるのか？

- 阿鼻叫喚の世界。表面に見えるものだけが、彼らの信じられるもの。
- テレビ系統は元々そういう風潮は強いのだが、読んでもらえない新聞の記者たちも同様になった。
- 絵になるもの、お涙頂戴のニュースが中心になる。難しいことを言っても、だれも見てくれない、読んでくれない。
- 例えば、災害廃棄物が公園に集積されたら、その場面だけで、「汚い」「邪魔だ」と判断してニュースで流す。ほとんどの視聴者、読者は、そう思い込む。物事の本質を考えなくなる。文句は来ないし、鋭い反論も来ないから、社内の上層部は安心。

2014年夏の2つの豪雨災害から マスコミはダメだったが、SNSは活躍した

- 結論から言うと、災害報道に関しては、マスコミは進歩していない。
- もっと言えば、退化している。
- 一番退化しているのは新聞。テレビはまだまし。放送法があるので、まだ、災害時（たとえば、台風や豪雨情報）はきめ細やかだ。
- ラジオは、AMだけでなく、コミュニティFMなどが発達した。阪神・淡路大震災のFMわいわいや東日本大震災で各地で生まれた。
- 新聞は、阪神・淡路以降、生活情報面だけを新設したが、その後、ほとんど進化していない。
- 生活情報→ライフラインの復旧情報や給水情報、お風呂情報などの細かい情報面を作った→読売は「震災掲示板」、毎日「希望新聞」など。

広島市土砂災害と丹波市豪雨災害

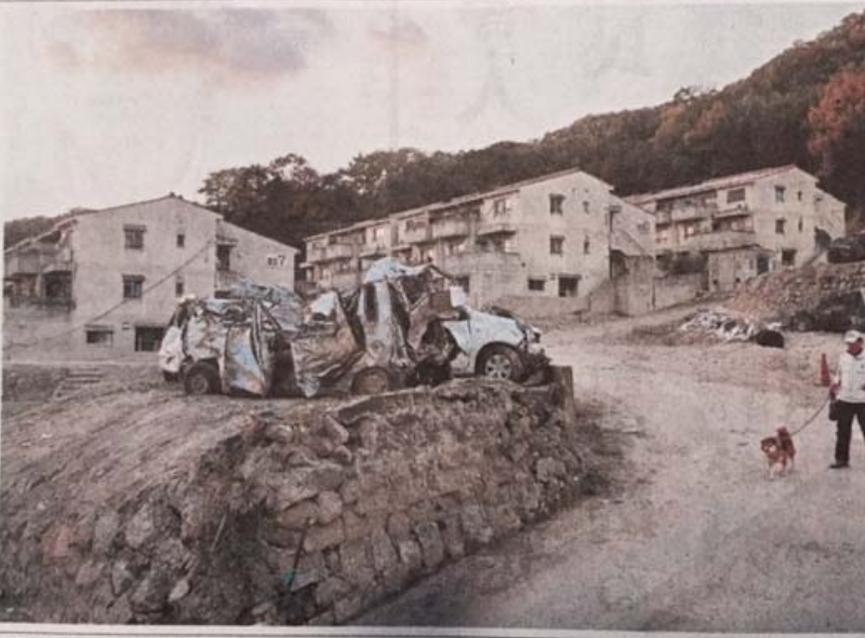
- 2014年7月30日～8月26日ごろにかけて、日本列島には台風の接近と上陸、前線の停滞、持続的な暖かく湿った気流の流入による大雨のために、北から北海道、秋田、石川、岐阜、三重、京都府、兵庫、広島、徳島、高知で大きな被害が出た。
- このうち、兵庫県丹波市は8月16日から17日にかけて局地的な豪雨に見舞われた。
- 住民のお話によると、17日午前2時から4時ごろが一番きつかった。多分、この時点で時間雨量100ミリ超える豪雨が3時間くらいは続いたのでは。
- その結果、9月21日午後3時現在の被害状況によると、死者1（市島町）負傷者4（氷上町2、春日町1、市島町1）、住宅全壊17（市島町）大規模半壊8（市島町）半壊39（氷上2、春日1、市島36）床上浸水140、床下浸水723計928＝住家。

広島豪雨災害に隠れた丹波市水害

■ 妻処分品から青酸成分39 スポーツ 26 27 29
 ◀ G、ドラフト1位岡本と仮契約 27 暮・将棋 小説 32

発行所 読売新聞大阪本社 〒530-8551 大阪市北

広島土砂災害3か月



広島市で74人が犠牲となつた土砂災害は、20日です。3か月を迎える。大規模な土石流に襲われた同市安佐南区八木では、大破した車が残り、県営住宅は住民が戻れないまま静まりかえっていた。被災地が日常を取り戻すには、まだ時間がかかる(19日午後、近藤誠撮影)

絆結ぶ帯 ずっとそばに

広島土砂災害きょう3か月

遺品の着物姉のもとへ



広島市北部の土砂災害の発生から、20日です。妹の高野千津子さん(当時60歳)を亡くした土田美恵子さん(62)(奈良市大宮町)のもとに先月、土砂の中から警察が見つけた着物や帯が届いた。ずっと仲が良く、支え合ってきた、かけがえのない存在。妹がいつも近くにいると感じていたい。と、泥汚れが残る帯をチークブルクロスにするつもりだ。

「ばかりだった」と美恵子さんは懐かしそうに振り返る。離れて暮らすようになっても、姉妹は毎週のように電話をかけ合い、何でも打ち明けた。千津子さんには、子供がいなかったからか、

「おばあちゃんになっても遊ぼう」と約束していただじやない。寂しさと悔しさを、涙が流れ続けた。10月上旬、泥まみれの着物5着と帯2点を手にした。なんとお使えさうなのだが、孫娘は「将来、結婚式で着たい」と言ってくるつもりだ。

度々、奈良まで遊びに来て、美恵子さんの孫娘(17)をかわいがつてくれた。一緒に奈良公園のライトアップを見に行ったり、週末の8月20日、千津子さんと夫、和郎さん(当時58歳)が、広島市安佐南区八木の自宅ごと土石流に流された。2人とも遺体で見つかった。その後、

「おばあちゃんになっても遊ぼう」と約束していただじやない。寂しさと悔しさを、涙が流れ続けた。10月上旬、泥まみれの着物5着と帯2点を手にした。なんとお使えさうなのだが、孫娘は「将来、結婚式で着たい」と言ってくるつもりだ。

【運営委員】 福澤政満 大学教授、上野博司 日本文化財 集井伸雄 研究所長、日中西美氏 名誉教授、平野高樹 松村豊留 研究所長、三輪嘉六 館長、考式

第9回

丹波市は非住家の被害が膨大だった

- 全壊27、大規模半壊2、半壊10、床上浸水140、床下浸水1433計1612→合計2540に被害。
- 林地崩壊も膨大→確認箇所226箇所（うち人家裏104箇所）、流出土砂は約50万立方メートル（河川・道路15万 m^3 、農地15万 m^3 、宅地9万 m^3 、山地11万 m^3 →広島市安佐南区→50万 m^3 と発表した。

そして、広島で土砂災害が起きた
(74人が犠牲に)



では、こうした膠着状態をどう打開するか

- 元々、研究者は、マスコミのことをあまりよく思っていないから、利用しようとしなない。マスコミは、調子のよい時だけ、研究者を利用しようとし、厚かましいからどんどん電話なので、訳のわからない質問を繰り返し、自社の論調に合致している所だけを使う。→余計に研究者は付き合いたくなくなる。
- 一方、行政に対しては、マスコミは昔から強気で攻める。行政はマスコミの顔も見たくない。行政も調子のよい時だけ、研究者を利用しようとするが、基本的には、研究者に対してもあまりよく思っていない。変な三すくみで、理想である、減災の正四面体にほど遠い。
- これでは、情報を受け取る側の住民にとって不幸極まりない。
- 本来、住民に対して、最もわかりやすく伝えるのはマスコミの仕事で、研究者と行政はそれぞれの立場で下手。マスコミが研究者の研究や行政がやろうとしている施策をしっかりと理解して、「通訳」して報道するのがいい。
- 打開策は、研究者や研究者に近い行政官が、マスコミの中で、勉強しそうな奴を探し出して、吹込む。新聞は部数が落ちて影響力は昔より、格段に下がっているが、インテリ層には訴えられる。テレビの報道番組、昼の情報番組ではなく、夜の報道番組、報道ステーションとかNEWS 2 3とかの専門記者に取材させて、出来れば、コメンテーターとして番組に出る。こういう積み重ねをしていくことが大事だと思う。

その試み、研究者とマスコミ関係者のコラボ、勉強会→関西なまずの会、名古屋のNSL、東京も昔あった？